

後援会ニュース「しおかぜ」は街づくりのコミュニティ紙として皆さんの暖かいご支援をお願いします。ご意見をお聞かせください。



しおかぜ

日本共産党浦安市東部後援会
News

第84号

2021年12月15日
編集責任者 元木計文
047-355-8526
部内資料

2022夏
参院選

日本共産党と野党共闘の勝利で 9条改悪許さず、政権交代の足掛かりを

総選挙で日本共産党を支持して下さった有権者のみなさん、奮闘していただいた支持者、後援会員のみなさん、ありがとうございました。

今回の選挙では、野党共闘が一本化した59選挙区では勝利し、自民党の重鎮や有力政治家を落選に追いこみ、野党の共闘勢力を42議席に増やしました。

7ヶ月後に迫った参院選、日本共産党は次の目標に挑戦します。市民と野党の共闘をさらに発展させ、自公とその補完勢力を少数に追いこみ政権交代の足掛かりをつくり、「650万票、10%以上」を獲得し、比例5議席の確保をめざし奮闘します。どうか支持を大きく広げて下さい。



【22年 参院比例候補（左から）大門みきし、田村智子、にひそうへい、いわぶち友、たけだ良介の各氏】

ごまめの歯ざり

時たまこの表題で小文を書いていますが、今回ほどこの言葉にぴったりの悔しい思いをしたことはありません。先日行われた衆議院選挙の結果のことです。

長い間続いている自民党・公明党によるべらぼうな政治。いまだ決着を見てないモリ・カケ・桜という前々安倍政権の私たちが国民を愚弄してきた政治、前菅政権による日本学術会議の任命拒否、原発汚染水の何の議論もない海洋放出の突然の独断。彼はまた、今回のコロナ爆発対応で軽症者は自宅で勝手に死ぬという政策を私たちに示しました。（事実。たくさんの人がそうになりました。これが決定的に国民の反発を買って、彼の命取りとなりましたが。）

この間オリ・パラの選択の余地のない報道の押し付け、続いて自民党総裁選のあふれんばかりの洪水と私たちをうんざりさせてきました。この乱暴極まりない一連の動きの中で衆院選は行われました。この結果、自・公も一定の罰を受けましたが、私たち日本共産党を含む野党側も思った前進を見ることはできませんでした。

幾多の小選挙区での目を見張るような勝利もありましたが、全体としては一敗地にまみれたといわざるを得ません。現行選挙制度のもとでの困難さと、力不足を痛感している所です。

新しい自・公政権は何ら変わるところなく、その亜流政治を続けていくようです。それでも私たちは国民のための政治をめざし、主張し続けていかなければなりません。もう数十年も私たち国民一人当たりの収入は増えていません。欧米はもちろん、かつては途上国といわれた韓国、台湾にも後れを取るところまで来ています。政治の在り方の象徴といえるでしょう。

来年、日本共産党は党創立100周年を迎えます。100年ですよ。よく昨今の政治家はブレない政治などと標榜しますが、日本共産党はこの100年、国民本位の政治のみを希求し続けてきました。この信条と政策ある限り、日本共産党は前へ進んでいきます。捲土重来、ご支援、ご鞭撻のほどをよろしく願います。

21年 12月

元木 計文



来年7月の参院選挙に私、斉藤和子が千葉選挙区から立候補することになりました。総選挙に続いての挑戦となります。どうぞ、よろしくお願い致します。総選挙で、改憲勢力が3分の2をしめたもとで、参議院選挙は、憲法を変え戦争できる国にして良いのかどうか問われる選挙となります。

参議院選挙に挑戦するにあたって私は、学校給食費を無料にするなど、どんな家庭でも学べる環境を保障し「子どもの権利をすべての政策の土台に位置付けたい」「現在の憲法にこそすべての人がより良く生きられる考えの土台にある」と話しました。

千葉県は、改選3議席のうち自民党が2議席を占めています。今度の選挙で「9条を守り憲法を生かす」議席を2議席にするために頑張ります。どうかお力添えをよろしくお願い致します。

元衆議院議員 斉藤和子



忘れない

しんぶん赤旗日曜版に読者の文芸欄があります。こんな詩がありました。一部を紹介します。

そうは言っても
この夏を忘れない
どれほどのいのちが
病院に辿り着けず
消されたか
息子がアパートの一室で
独り逝った
納得いかぬ母の嗚咽
自宅で独り赤ん坊を亡く
した母の
滂沱の涙
床を叩いて泣き崩れる母
たちの
喉掻きむしる叫び

【2面につづく】

新型コロナウイルスの感染者が減り、安堵が広がっていますが、すでに全国で170万人以上が感染し18000人以上の方が亡くなっています。一人一人に家族や親せき、友人、同僚がいたことを思うと、どれだけの人を悲しませ、今も苦しめているか。「自宅待機」という名の放置や、非常事態宣言のもとで強行されたオリンピック・パラリンピックを忘れてはならないと思います。今まで病院や保健所を減らし続け、医療や福祉に背を向けてきた「命より金」の自公政権の罪も。

忘れてはならないといえば、森友・加計問題も、桜を見る会もです。公文書改ざんで自死した赤木元財務省職員のこと。まるで何もなかったかのような顔をして現れ政界復帰？した安倍元総理の笑顔よ（ああ、腹が立つ。大臣たちの汚職・不祥事の数々も何ひとつ解決していません。学術会議の任命拒否についても、いまだに説明もないままです。

忘れっぽい私は、忘れてはならないたくさんあることを、しつかり思い出さなければいけないと思っています。許されないことに対しては怒りを忘れないように。日本共産党のホームページでは「しんぶん赤旗」の過去の記事が見られるので一助になります。そうそうこんなこともあったと怒りを新たにしたり・・・。

コロナに関しては、新たな新種株も見つかり、まだまだ予断を許さない状況です。また、来年度から75才以上の医療費の窓口負担が2割に上げられようとしています。私たちは気を緩めることはできませんね。以上、今私が思っていることです。

(日の出 S)

私の故郷自慢

No. 14

◆ 私のふるさと 岩手県宮古市 ◆

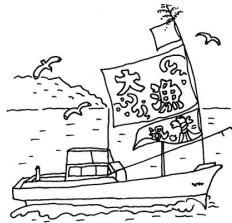
齊當 あつ子



黒い波が次々に家や船や車そして人々まで飲み込んだ東日本大震災の大津波、私はあの日、テレビにくぎ付けだった。母や姉妹、従妹たちはあの近くに居なかったろうか、船が打ち上げられた港から1キロの所にある母校（高校）は無事だろうか…、連絡が取れない中不安が募るばかりだった。

私の故郷は岩手県宮古市、三陸の港町で東日本大震災の被災地である。昔の宮古は秋刀魚の基地港で秋には町中が秋刀魚で溢れ、バスの中まで秋刀魚の匂いで満たされていた。冬になると鮭のお出し、家々の軒先には新巻きサケが何本も吊るされ北風にさらされていた。天気の良い日の朝は、閑伊川のはるか向こうに早池峰を拝むとも出来た。

私が生まれた土地は二本の川に挟まれた農村、田んぼや畑を見下ろすように家屋が山沿いに並ぶのどかな集落だった。昭和30年代までは多くの農家で牛馬を飼育していた。



それらは農耕馬であり山から木を運び出す作業に携わる”動力”でもあった。小学生の頃、仕事帰りの馬車が子どもたちを荷台に乗せてくれることがあったが、砂利道をガタガタさせて移動する荷台で、私たちは足をブラブラさせながらお喋りに花が咲かせた。荷馬車は当時の私たちにとっては”高級車”だった。秋になると村祭り以上に賑やかな競り市が催され、川沿いの馬検場はあちこちから集まった馬や人で溢れ、競の掛け声で活気に満ちていた。私は婦人会のお店（テント）でうどん食べたり50円の小遣いでお買い物をするのが楽しみだったが、ミルク飲み人形や抱っこちゃん人形が買えないのは悲しかった。

雪崩打つ 古い！

村上 ますえ

「電話使われてませんって
年賀状も宛先不明って返ってきてたけど
どこ行ったの 彼女」
同級生からの電話
「娘さんとこでも行ったんじゃない
同居の息子さん亡くなって」
「二人で暮らしていたのー それじゃねえ」

ため息に似た息遣いが電話でも伝わる
「うちも たいへん
施設に入れたと思ったら コロナでしょ
ろくすっぽ面会もできないのに
転んだから整形にとか やれ歯医者にとか
車いすのボケ老人連れて
老老介護の日々でござーいー」

かねがねあけっぴろげな友だから
こんなに語れるのだろう
一人肯きながらいる



同じころ届いた従兄のメール
「家内と二人

今は仕事となった飯事遊びの毎日です
家内はいつもお客様」



みごとな戯画化

企業戦士のかつてと現在のこの落差
途惑うのは私も彼も

大震災の後、集落を貫く高速道路が走り集落の姿がすっかり変わった。「これからは鍵を掛けなくちゃね。」と言った亡き母の顔が今も浮かぶ。古希を過ぎた今、私の脳裏に浮かぶのは昭和の宮古である。